宮探偵は捜査の『虜』2

たひた荘

成人向け
R18
ADULT ONLY
18歳未満
購入・閲覧禁止

名探偵は捜査の虜 2

洋館で起きた連続失踪事件
に挑む名探偵シリーズ

前回までの捜査状況

ある洋館で起きた連続女性失踪事件の
捜査にやってきた名探偵とその助手。

順調に捜査が進んでいた最中
あと一歩の所で名探偵は犯人達
に捕まり暗示を植え付けられてしまう

捜査の記憶は塗り替えられ
知らず知らずに思考改変をされる名探偵は
昼は犯人捜査
夜はドスケベ捜査の日々を送るようになる。

同時刻、
異変を怪しんでいた助手もまたメイドの執拗な
誘惑に抗えなくなっていき…

――おかしい
ここ最近考えがまとまらない
私は昨夜何をしていた？
いけない…
ただでさえ犯人が近くにいるかも知れないんだ
この違和感は何だ…♥
助手君にも
警戒するよう伝えなくては

この角…
塗装が少し剥げてる、
それに机の位置が前より数センチずれてるみたい。
捜査の手がかりになる。助手君、メモして置いて

夜の部

おっここ♥角すりすり♥ぎもちぃ♥

んっ♥あっ♥
おっ♥こっこ♥
はー♥
はー♥
おほっ♥
ふー♥
ふー♥
あ♥
きもち♥
ぎくっ
ビクッ
ビクッ
ムクッ
ムクッ
ムクッ
ムクッ
ビクッ
スリ
スリ♥
スリ♥
ズン♥
ズン♥
ズン♥
ピーンッ
ガク♥
ガク♥
ガク♥

おっおぉ♡すれてっ・・・すりすりっ♡
すりすりぃ・・・♡強く押し付けてっ♡
もっとぉ♡すりすりぃ♡
おぉ♡ここっ・・・ここの角っ！
きっと失踪者も・・・こうしてっ♡
自分で追体験・・・することでっ♡
真実をっ♡確かめないとっ♡♡

助手さんっ♥
研修中の子達が何か情報を持っているそうです♥
早速捜査に協力してもらいましょう♥
（名探偵さんがいない間に♥）
よし♥よし～♥
ん～？何言ってるのか聞こえませんよ～♥
ほら～2人とももっと積極的にっ♥
これだけやると流石に証拠残っちゃうかな～♥
ぱんっぱんっ！
パンッ
ぱんぱんっ
あはっ♥
ん～っ♥
スリスリ
ほーっ♥
あっ♥
ほーっ♥

に協力いましょう♡
（名探偵さんがいない間に♡）
ビシャ
サッ
おっんっ♡はー♡
ぱんっ
パンッ
ぱんっ
パンッ
ぱんっ
パンッ
ぱんっ
はー♡
あー♡
んー♡
ん～っ♡
スッ
スッ

おっ…んっだっ大丈…夫ですっ…

ちゃんとっ動きますからっ

助…助手さんっ気持ち良いですかっ？

んっ…ひっ…はぁはぁ…

助手さんはこれから腰振って射精して

おちんちんだけ勃てておくだけで良いんですっ

頭の中が真っ白になっちゃうようにっ

そうなれば皆幸せですっ

助手さん！これを見てください♥
こんな所に名探偵さんのお洋服がっ
何かあったのでしょうか
早速調べて見ましょう！
メイド見習い
ペコッ
フリ フリ
いいですよ～♥
捜査は順調です♥
私達はいつでもお相手しますよ♥
もっと腰振ってみましょう♥
思い切り発散しましょうね♥
パン パン パン パン
ズブッ ズブッ

メイド見習い
んな所に探偵さんの洋服がっ
何かあったのでしょうか
早速調べて見ましょう！
これに興奮しちゃうんですね～
もう変態さん確定ですね
パン
ズブッ
パン
ズブッ
パン
パン
パン

あんっ
んっ
あっ
はっ
んっ
ふっ
ふっ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ

はいっ
おもてなしは気に入ってもらえたみたいで

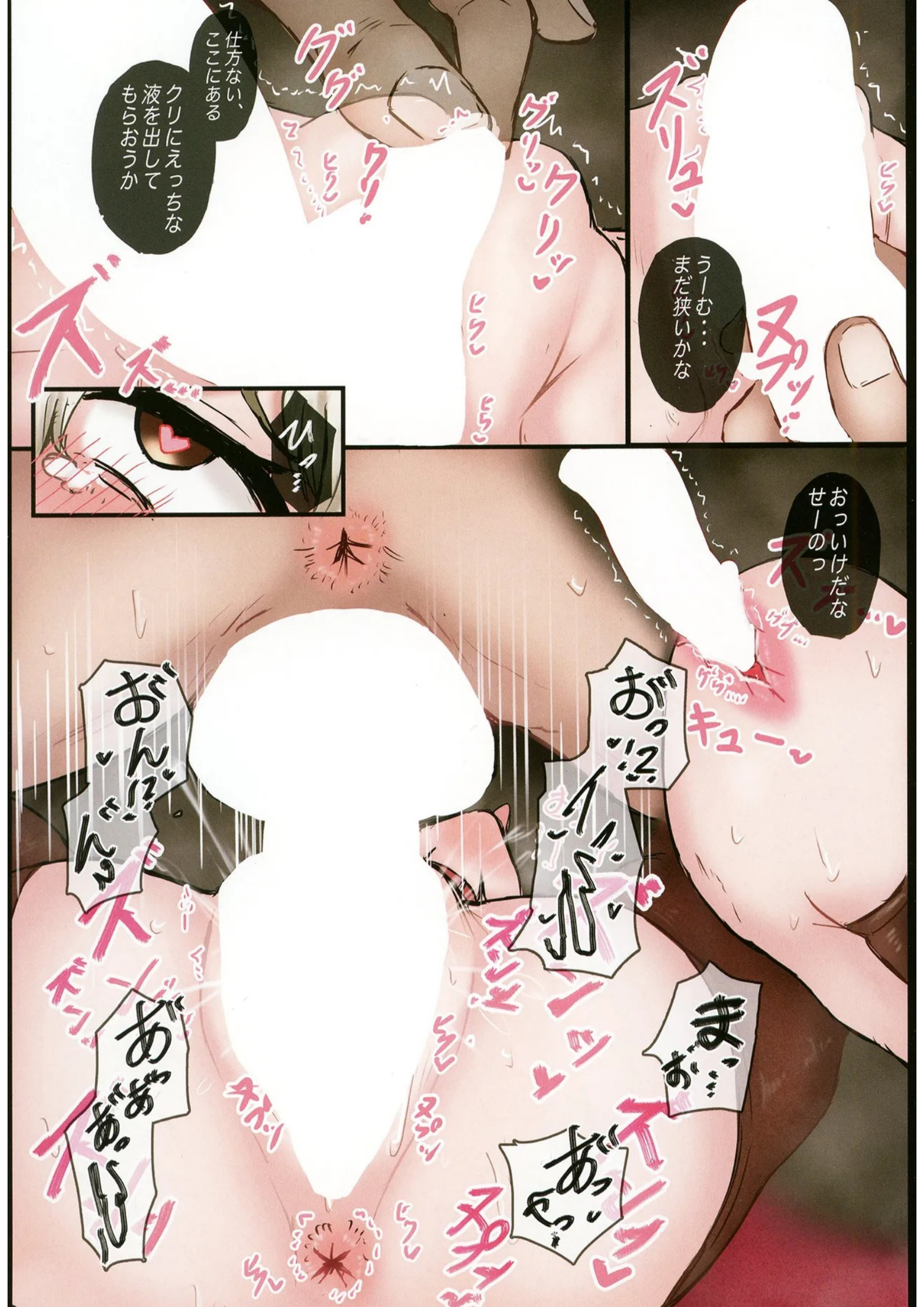
助手さんは腰ふりに夢中です
そちらはどうですか？

パン
パンパン
パンパンパン
パンパンパンパン
パンパンパンパンパン

それは嬉しいですね
こちらの名探偵さんもだいぶ慣れてきた所です

クチュ
クチュクチュ
クチュクチュクチュ
クチュクチュクチュクチュ
クチュクチュクチュクチュクチュ

今はイキ癖を覚えてもらっています。


うーむ…まだ狭いかな
ズリュ
ヌプッ
仕方ない、ここにあるクリにえっちな液を出してもらおうか
グリッ
クリッ
ズズ
おっいけだなせーのっ
ズニュ
キュー
おっ!?
まっ
おんっ!?
あっ
あぁぁぁぁ
ズンッ
ヌプッ

ヘコ
ヘコ
パンッ
パンッ
ズンッ
ズボッ
パンッ
パンッ
ズズ…
ズブッ
パンッ
パンッ
パンッ
あっあっ
やっ
はーはー
イってます!
あっ
あっ?
やっ
もう
イク
あのあっ
トロ
はー
はー
はー
おっ?
たぷ
たぷ

キュッ
ドピュ
ピュ
ピュルルル
ゲゲ…
いや～
今日もたくさん出ましたな
名探偵様の熱心な捜査には感服します
ぜひ今夜提供した情報も
捜査にお役立てください。
たらぁ～

わ〜♥ だいぶほぐれてきましたよ〜♥

今夜は私がお相手しますので

もーっ♥ 暴れちゃだめですって〜♥

情けない声出して♥ 良い子良い子してあげますからね〜♥

ではっ♥ いただきまーす♥

楽にしてくださいね～

んっ入った…

あ～これこれおいし～っ

この感触がたまらないんですよ

やっぱり初物は締まり良くて

最高…

そろそろ良い感じになってきたかな〜？

うん♡ちんぽイライラしてる♡

おいそう

それよりもっとちんぽ硬くしてくださーい♡

せっかく「捜査」に「協力」してあげてるんですから♡

ほら♡入りますよ〜♡

もっもう…限界ですっ出させてっ！助

だーめっ♡

はいっ
いっちにー
いっちにー
いっちにー
パン
パン
パン
パン
ズン
ズン
ピク
ピク
ピク
ピク
ん〜？
何惚けた顔してるんですか〜？
顔そらしちゃいけないんですよ
あっ
あっ
んっ
ピク
ピク
ほらっ舌出せ
くちゅ
くちゅ
くちゅ
レロ
レロ
レロ
はー
はー
イケと言うまでイッちゃだめです
しっかり覚えていきましょうね
バチュ
バチュ
バチュ
バチュ
バチュ
バチュ
バチュ
バチュ
ピク
ピク
ピク
ピク
くちゅ
くちゅ
はー
はー
レロ
レロ
ふー
ふー
ふー
ふー
はー
はー

ピロンッ…

助手の調教は進んでいますか？

はいっこちら順調です！
暗示もうまく浸透してるようです

では予定通り連れてきてください、
怪しまれないようお願いします

檻の中に入ると誤認暗示のスイッチ
が入るので

はい、畏まりました！
誘導します！

名探偵さんと助手さんに楽しんでい
ただけるようがんばりますー！♥

現在
しつけ中♡
ドクター
ふ～ひとまず
こんな所ですかね
一時的に暗示は
解除していますが
暴れないように。
ご主人の趣味
みたいです。
では今から助手さん
を連れてくるので。
あっ
ちなみに正体バレたら
助手さんの命は
ないと思ってください。
ぎくっ
ビクッ
もぞっ
ぶるっ
ぶるっ
ぶる

助手さん！
あれっ！見てくださいっ
たっ大変だ早く助けないと
もしかして失踪者の方でしょうか…
鍵はかかってないみたいです！
さぁ！入りましょう
ほらほら〜♥
ちゃんと腰振って助けてあげてくださいねっ♥
私が手伝ってあげますからね♥
暗示中
現在しつけ中♥
パンッ
パンッ
パンッ
ズプッ
ヌプッ
ビクッ
ぞくぞく
はーはー
あっ
おっ♥
ぎゅっ

さぁさぁ成果を見せてくださいね～
指
クチュ
クチュ
トン
トン
トン
ビクッ
あっ
ここらへんかな～
イケ
イケ
イケ
イケ
ビクッ
ビクッ
ビクッ

証拠を十分にそろえ、犯人に突きつける。わなわなとこぶしを震わせ、今にも殴りかかってきそうな彼を横目に帰り支度を始める。そしていつものようにこれまで捕まってきた犯罪者は口を揃えてこう叫ぶ。

「絶対に許さねぇ、覚えてろよぉ……！」

漫画のような捨て台詞を吐きながら連行されていく。許さないだの、覚えてろだのまさにこっちの台詞だ。

「今回の事件もお手柄でしたね。さすが名探偵サラ、ですね」

「ああ、助手くんもなかなかいい働きぶりだったよ」

「ありがとうございます。そろそろ名前で呼んでくれてもいいんじゃないですか……？」

「ふん、私より先に犯人を捕まえてから物を言うんだな」

私の助手をしている彼は私よりも年齢こそ上だが、まだまだ心が弱くどこかほっておけない。しかしながら、私が見落としてしまっていた証拠を見つけ出し手助けとなるなど頼りになる一面もある。

「よし帰るとするか。忘れ物はないかな、と」

意気揚々と助手を見ると、目の前に私の鞄が突きつけられている。

「まったく、困りますよ。自分が持ってきた鞄くらいちゃんと管理しておいてくださいよ」

「……。私のお世話も含めて君の仕事だろ、助手くん？」

【ドクターメモ】
・昼の捜査時でも無意識に夜の暗示影響が顕著に現れる
・経過は良好。
現在
―昼の捜査―
ほらっ
現場に残された体液が助手君のかも知れないしっ♥
味を確かめないとっ♥
じっとしててっ！♥
あくまで確認だからっ♥
おいしっ♥うまっ♥
ぢゅるるる
んぐっ
ぐぽっ
じゅる
ぢゅぷ
ぢゅぷ
はぁ
ぢゅぷ
ぢゅぷ
ぢゅぷ

ちょっ…どうしたんですかっ！

こんなのっ今までっあっ

ビュルルルルッ

ドクッ

はぁはぁ

ドクッ

ドクッ

ドクッ

?
おっ？
アー♡
はー♡
んっ？
はー♡
はー♡
はー♡
はー♡
フー♡
あ♡んこ
ムクッ
ムクッ
ムクッ
ムクッ
つづく

（名探偵は今日も気付けばマイペースに単独捜査に向かったらしい）

失踪事件の手がかりは一向に見つからず、館の住人たちは誰もが愛想よく、それでいてどこか得体の知れない不気味さがある。

助手は小さくため息を吐く…

するとスタスタと見慣れたメイドが駆け寄ってくる。

「助手さん！良かった、探しましたよ～！」

彼女は少し息を切らして立ち止まり、周囲を警戒するように話す。

「実は、館の中で働いているメイドの中に、館で“妙なこと”が起きてると気にしている子たちがいまして……」

するとその後ろから、静かに二人のメイドが現れる。

「今日は、この研修中の子達が捜査に協力してくれるそうです！」

既に待機している身に覚えのないメイド。

一人は凛とした空気を纏っている。

黒髪を高い位置でポニーテールにきっちりと結び、背筋をピンと伸ばしたメイドは、規律正しく一礼する。

「リンです、よろしくお願いします」

声色は落ち着いており、立ち振る舞いには隙がない。

表情は落ち着いいてしっかりしていそうな風貌

もう一人はブロンドのセミロング。柔らかなウェーブが揺れる。

リリア「あっあの…リリアって言います…あのっ私……いえっなんでもないです…怖くて…」

今にも泣き出しそうな表情で、小柄な身体を縮こまらせている。

視線は落ち着きなく泳ぎ、指先でエプロンの端を不安そうに弄っている。対照的な二人のようだ。助手はふたりを見つめ、すぐに顔を引き締めた。

助手「何か見た…というと？」

リリア「は、はい……夜中に、どこか遠くから……女の人の、叫び声みたいな……それと、変な物音が……」

「叫び声？」

「はい……苦しそうな、でも……時々、嬉しそうな声にも聞こえて……」続いてリンが、冷静な口調で話す。

リン「記憶がはっきりしないのですが、、朝方にお部屋の清掃をしていると家具の位置が少しずれていたり、水場でもないのに床が濡れた跡があったりするんです」

リリアの怯えたような声、リンの怪しんでる様子に助手は興味を持つ。

しかしどこか――違和感もある気がする。

「詳しい話は……この先の部屋でどうです？　誰かに聞かれたくないでしょうし」

「お部屋、用意しますねっ♡」と、メイドさんが明るく頷く。

そして三人に導かれ、助手は奥の部屋へと足を踏み入れる。

こちらですっ♡

……

……

メイド「それじゃあ、始めましょうか。鍵、かけちゃいますね」

カチリ。

扉の鍵が回る音とともに、助手の視界が滲み、灯りがふわりと揺

れる――

分厚い扉の鍵が、静かに回る音。

次の瞬間、灯りが揺れ、助手の視界がかすむ―

気づけば助手は床に倒れていた。

頭はメイドさんの膝の上。

ふかふかとした太腿と、顔を押し潰すようなおっぱいの感触に包まれる。

メイドさん「え～♡なんていってるんですか～♡うまく聞こえませんね～？ふふっ」

むにゅ♡むにゅ♡むにゅ♡♡♡

笑顔を浮かべながら、メイドさんは右手で助手の胸元を撫でっグイッとつねる。

もう片方の乳首は研修メイドのリリアに舐められている

くいっ……ねじっ……くちゅ…♡

助手はびくりと震えるが、声にならない。

助手の左胸元では、リリアがしゃがみ込んでいた。

その顔を近づけ、乳首をちろちろと舐め回す。

慣れていない舌使いで、熱っぽく、息を絡めながら口を動かす。

リリア「……ふぅ……んっ……ぺろ、ぺろぺろ……助手さん、きもちいいですか？」

「わたし……じょうずに、できてますか？」

ぺろっ…ちゅっ…ちゅるるっ…ぬるぬる…れろれろ…♡

涙目でゆっくりと助手の乳首を舐める

ぺろっ…ちゅっ…ちゅるるっ…ぬるぬる…れろれろ…♡

何が起きているのか助手には現状が把握できない、、

パンッ♡パンッ♡パンッ♡ズンッズンッズンッ♡

助手の腰には、研修メイドのリンがまたがって騎乗位をしている。

黒髪ポニーテールを揺らしながら、必死に上下に身体を動かしている。

真剣な目で、額にはうっすら汗。

表情は落ち着いてるように見え、取り繕ってはいるが指先が小刻みに震えている、職務に集中しようとするが歯を噛み締めて必死になって腰を上下に動かしているようだ。

リン「あっおっ♡んっ♡だっだいじょうぶ♡できます。ちゃんとやりますから♡」

「こっこの程度の奉仕……手順通りに進めれば……いっ♡」

「あっんっ♡任せてくださいっっおっ♡おっ♡あっあっあぁああ♡」

メイドさんは静かに微笑みながらリンの耳元で囁く」

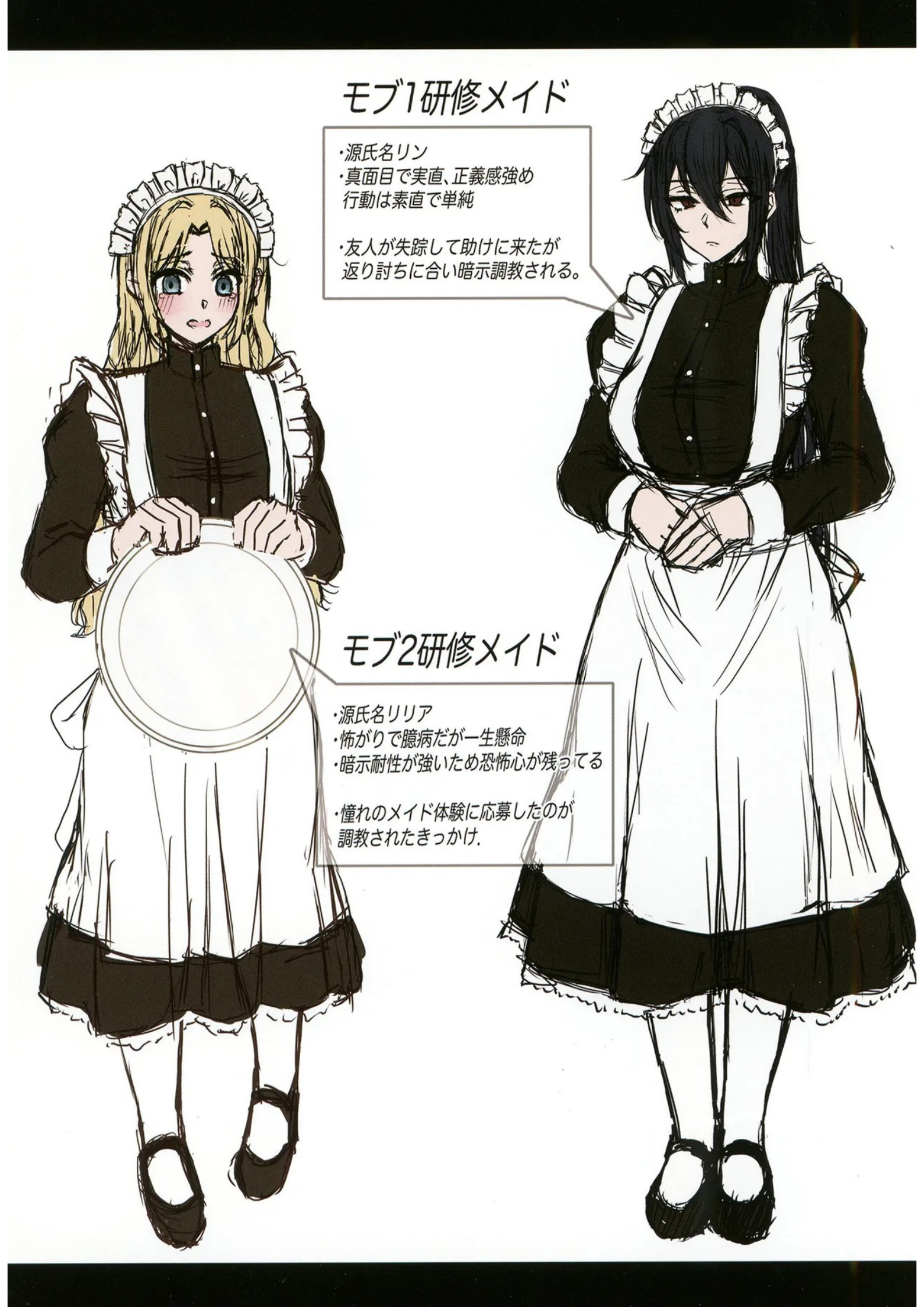
メイドさん「焦らなくていいんですよ、リン。あなたの真面目さは信用してますからね♡学校でも文武両道、先生や周りの生徒からの支持も厚く将来を期待されていたみたいじゃないですか？もっと下品に喘いで良いんですよ？皆あなたのその“才能”を誇らしく思っています♡」

リン「あっあぁ♡お褒めいただきありがとうございますぅうおぉおおおお♡いぐっ♡いぐっ♡」

リリアが不安げに見つめる。

「リンさん……すごいっ……」

背筋はピンと伸びている。
リン「おぉおっ♡おぉおほ♡ お゛ぉおっ♡ おぉおほっ♡ ぎもぢぃいいっ♡ おほほおぉぉっ♡♡」
ずぷっずぷっ……ずぷっずぷっずぷっ…♡
ぱんっ、ぱんっぱんっぱんっぱんっ……♡
「あっ♡ い゛ぐぅっ♡ で、でるぅううううっ♡♡ ぎもぢぃいぃぃぃぃぃっ♡♡♡」
ぱんっぱんっぱんっぱんっ♡ ずぷっずぷっぬちゅぬちゅっ♡
「あっ…♡ い゛ぐぅっ…♡ ぅうっ…♡ おぉおほぉおっ…♡♡」
ズプッズプッ！ グチュグチュグチュッ！
リンの腰が一際強く打ちつけられ、助手の身体がビクンと震える。
次の瞬間、
助手「んっ……んんー！ んーーー！」
ドピュッ！♡ビュルルルルッ！ドクドクドクッ！♡
「いっひゃぁあああ♡お゛ お゛ぉおおぉぉお♡♡♡んあぁぁあああああっ♡♡」
膣が吸い付くように助手を締め上げ、白濁がびゅるるっびゅるるる、、と断続的に注がれていく。
「あぁ…♡まだでてる…♡私は優秀だ♡……♡」
助手は言葉にならぬ吐息を漏らすが、声にならない。
その顔は、メイドさんの胸に深く押し当てられており体も細かく痙攣している。
メイドさん心の声（うん♡やっぱりリンは飲み込みが早くて助かりますね。こうでなくちゃいけないという思い込みが強いほど暗示で思考のすり変えやすい♡）
（ただその一方で…）とメイドはリリアの方を向く
リリア「あっ……ひっ……」
放心状態のリンを見ながら小さく震え、足がすくみそうになる。
（リリアは元々暗示への耐性が強いみたいね、時間はかかりそうだけど丁寧に調教していかないと♡）
メイドさんは静かに笑みを浮かべ、リリアの肩に手を置いて囁いた。
メイドさん「慌てなくてもいいですよ～♡助手さんは、まだまだ射精できますから♡次はリリアの番ですよ」
メイドはそういうと射精を終えた助手のちんぽへと手を伸ばす。
シコシコシコ♡シコシコシコシコシコシコシコシコ♡♡
慣れた手つきで刺激を与えると、助手のちんぽは再びムクムクと起き上がる、それは強制的な勃起。
メイドさん「リリア、助手さんをこれから腰を振って射精することしか考えられない猿に変えていきましょうね。快楽に溺れて頭の中真っ白になっちゃうように…♡ そうすれば名探偵さんも一緒に…ね？簡単でしょ？　一方でリンは事後の余韻でビクビクと床で痙攣し、濁った瞳で虚空を見つめて「優秀……わたし、優秀……」と呟いている。
「まだここにきてリリアも日が浅いですがっゆっくり覚えていきましょうね～♡助けなんか来ないって事を早く知りましょうね」
そうメイドさんは優しく告げる。


モブ1研修メイド
・源氏名リン
・真面目で実直、正義感強め
行動は素直で単純
・友人が失踪して助けに来たが
返り討ちに合い暗示調教される。
モブ2研修メイド
・源氏名リリア
・怖がりで臆病だが一生懸命
・暗示耐性が強いため恐怖心が残ってる
・憧れのメイド体験に応募したのが
調教されたきっかけ.

予定キャラ

保釈金持ち

おじ。

・名探偵に事件を解決され逮捕、お金を積んで保釈。

・名探偵に復讐心と欲情を持っている

口調

↳「な…なぜだっ!」

「ふざけおって…!」

「見ておれ…いつかかならず…」

あとがき。

たひた荘です。
今回は前回の名探偵さん本の続き2作目を描きました、
助手パートや名探偵さんの補完部分など、好きなシチュは止まりませんね。
特に昼は普通に捜査してたはずが夜の暗示の影響で
昼もえっちになっていくという展開がベタではありますが自分に刺さります。

メイドさんは助手を名探偵さんとは違った方向で責めたい
と思っているのでモブメイドさん達も使って頑張ってほしいです。

前回よりコマ割りを増やしてみたり行為描写追加するなど
漫画表現の方勉強していきたいですね。

前回同様
手にとっていただいた方々、並びに支援サイト含め応援して
くださる方々の支えで出来た本でもあります。

誠にありがとうございます、いつも励みになっております。

今後ともたひた荘よろしくお願いします。

名探偵は捜査の虜2

サークル:たひた荘
発行者:たひた
発行日:2025/12/31/C107

連絡先
メール→tahita2007@gmail.com
各SNSダイレクトメッセージ

印刷：株式会社グラフィック

たひた荘のX(Twitter)
@bdu9BNSuAY7iLOF

FANBOX
詳細差分＋メモなど

Fantia

名探偵は
捜査の虜
CAPTIVE DETECTIVE
2